

新・農業経営者ルポ／第99回

あきらめず、自負心を持ち続け、 たどり着いた干拓地での大規模経営



大韓民国



Uターン就農がまだ珍しかった1996年に稲作を始めた。規模拡大を目指し、韓国最大の財閥、現代グループが開発した瑞山干拓地に入植。現在は200haを超える規模で稲作経営を行なう。一時は法人解散の危機に瀕しながらも、帰農者の意地とプライドで法人を率いてきた。全国の稲作農家をまとめる組織の会長にまで上り詰めた経営者の心意気とは――。

取材・文／青山浩子 撮影／加藤祐子

瑞山（ソサン）干拓地。ソウル市から南西に車で約3時間のところにある。韓国最大の財閥、現代グループ（現代建設）が造成したことで知られ、農地面積は1万haに及ぶ。

広大な水田をひたすら走りぬけ、事務所に到着。約束時間に少し遅れたこともあり、恐縮しながら「すみません。日本から取材に来ました」と挨拶。林鍾完（イム・ジョンワン）さんは笑顔を見せつつ少しこわばった表情でテーブルについた。

『農業経営者』の説明や取材の主旨など詳しく言いたかったが、どうもそんな雰囲気でもない。取材の主旨を簡潔に説明し、早速この干拓地に入植したきっかけから尋ねると、「〇年に入植し、〇年に乾燥・調製施設を建てて」と立て板に水のごとく。下調べが不十分だったこともあり、話についていけなかった。

林さんは瑞山干拓地営農組合法人の理事の1人。林さん以外に理事4名（1人は代表理事）と監査1名がいる。だが、林さんが差し出した名

刺には「韓国米専業農中央連合会会長」とある。今年から兼務になったという。「韓国米専業農」とは稲作農家の権利を守るため、政府に要請を行ったり、提案をしたりする生産者の全国組織だ。会長のメンツが威勢を見せたのかもしれないが、どこにいまま取材を進めていった。

大規模農業を目指し干拓地に

林さんは瑞山の近く、洪城（ホンソン）の出身。親は農業を営み、本人も地元の農業者大学校農業機械科を卒業したが、ソウルに上京。長らく子供たちの学習塾を運営していた。洪城に戻って農業を継いだのは1996年。「年をとったのでUターン倒を見ることになったのでUターンして農業を始めた」。

農業で食っていくと決めた林さんは、農地を買い増して規模を広げていった。当時、ウルグアイ・ラウンド交渉後のWTO体制に入ったばかりだったが「そんなことを気にする余裕もなく、（規模拡大して）上に

行きたいと思うだけだった」。

瑞山干拓地への入植の話が舞い込んだのはそれからしばらくしてから。瑞山干拓地は現代グループの創業者、故・鄭周永（チョン・ジュヨン）氏の肝いりで79年から工事が始まった。干潟の広がる湾を干拓によって埋め立てた。84年に最終の潮止め工事を終え、86年からそのまま現代グループが直営で稲作を始めた（最終工事の完了は95年）。全体で1万5400ha、農地面積だけで約1万haを造成。ところが経験不足が災いし、計画通りには進まなかった。反収300kgもとれない水田もあり、結局一部を残し、農家への分譲を決めた。だが、農地価格が特別安いわけでもなく、応募者がなかなか現れなかった。

瑞山干拓地は忠清南道に位置する。それもあり、この地域の稲作農家の多くがメンバーとなっている「米専業農忠清南道連合会」に入植の話が持ち込まれた。林さんの干拓地との接点はここから始まる。林さんはいまや全国組織の会長だが、地方組織の会員になり、次第に忠清南道連合会の事務局長、副会長といった役割を歴任していた。自身も規模拡大を目指していたこともあり、専業農家の仲間に「一緒に入植しないか」と持ちかけた。ためらっている



瑞山干拓地営農組合法人 理事 林 鍾完 韓国 忠清南道瑞山市

イム・ジョンワン●1963年生まれ。84年、禮山農業大学校農業機械科卒業。ソウル市で学習塾を経営した後、故郷に戻り、96年より就農。瑞山干拓地に入植し、03年に瑞山干拓地営農組合法人を仲間の農家とともに設立。現在の経営規模は219ha。12年1月から稲作経営者の組織「韓国米専業農中央連合会」会長、韓国農水産大学現場教授などをつとめる。

あきらめず、自負心を持ち続け、たどり着いた干拓地での大規模経営

周辺の農家の背中を押そうと、先に個人での入植を決め、仮契約をした。すると次々と仲間も入植を決めた。

林さんは「皆が初めてここで農業をするのだし、一緒にやろう」と法人化を提案。「個人がバラバラだと販売も手間がかかる。一カ所にまとめて販売すれば競争力もつく」。

03年、農家11人の共同出資で430ha規模に及ぶ「瑞山干拓地営農組合法人」を設立した。

法人解散の危機乗り越え

それぞれの農家が、第二の人生をかけてつもりで出発した。しかし道は険しかった。

水田は1枚1.5ha。「田んぼとはいえないようなほ場もあった」（林さん）。また、全員がベテランの農家だったとはいえ、干拓地での農業は初めて。プラウで深く起こすと塩分が上がりすぎることもあった。

そのうち1人、2人とメンバーが脱退していった。農家によって条件の悪い農地を割り当てられた人もいて、「一人で別の場所で行うから」と法人から離れていった。

お金の問題もあった。購入価格は一坪2万6000ウォン。法人への参画とは別に、個人で農地を購入した人も多く、巨額の融資を受けていた。ところが、所有農地ゆえ

担保能力がある」とみなされ、一般の農家が受けられるような低利の制度資金の対象からはずれ、市中金利（9.2%）を負うことになった。「利子の支払いがでずに辞めていった人もいて、一時は解散寸前だった」。

林さんは、辞めていった仲間の田んぼを引き受けてでも法人という形態を守り抜いた。そこには林さんの戦略があった。「稲作で生きていくには大規模経営でいくしかない」。

林さんが就農した95年当時、韓国人は年間1人当たり100kg以上の米を食べていた。その後、食の西欧化によって右肩下がりでの消費量が減り、現在は75kg。一方、米価は変化なく、人件費や機械、燃料などのコストは膨らんだ。政府も規模化、団地化を進めており、政策に則った農家に支援を集中しようとしている。このことを米専業農連合会の役職を受けながら、感じ取っていたのだらう。この時の判断が結果的に経営の安定・拡大へつながっていく。

「創設当時の役員で残っているのは私一人。私以外の理事は後から入ってきた」。メンバーの出入りもあって現在、法人が管理する農地は120ha。代表理事（1人）と理事4人の個人所有の面積（10～40ha）を合わせると219haとなっている。

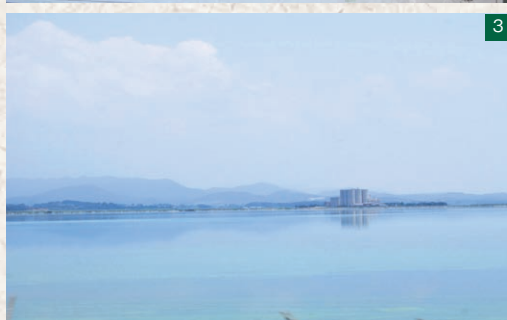


2



1

1 干拓地のほ場分布図。干拓地全体では3300haを法人が、1200haを個人が、残りの約10%を現代グループが管理している。ピンク色で塗られた場所が瑞山干拓地営農組合法人が生産する水田。中央部分の遊水地の西側に位置するエリアの3km圏内にまとまっている。2 水田の様子。田植えは4月下旬から6月上旬頃に行ない、収穫は10月中旬から11月初旬。栽培している品種は、「黄金（ファングム）」と「三光（サングァン）」。



3

4 穀物乾燥用サイロ。下から空気を送り、中を掻き混ぜて通風乾燥するので低温で保管できる。容量は2棟で400 t。5 6 7 自動化育苗施設。生産できる苗箱は4回転で約8万枚。播種機の能力は9000箱／日。苗箱はコンクリートで遮光、密閉された催芽室でボイラーをたいて、3～4日で発芽させる。発芽後は、太陽光を利用したハウスゾーンで育苗する。



他の地域に比べ10%以上増収

「最初の頃は満足な収量はとれなかった。洪城での稲作の経験があったので、干拓地の特性に合わせて応用してきたが、コツがわかるまでに3年がかかった」と林さんは言う。

巨大なほ場での作業となると、大型機械も揃えなければならぬがそれにはお金がかかる。そこで最初は無理な投資をせず、田植えや収穫の一部をコントラクターに委託した時代もあった。年1回の航空防除も専門業者に委託した。「ここには電線が全くないでしょ？ 航空防除しやすいようにしてあるんです。大量の電気を使う乾燥・調製施設だけは地中に電線が埋めてありますけどね」。現在は必要な機械は全て揃えている。それでも基本的な作業は90馬力のトラクタ4台でこなす。

ほ場はすべて3 km圏内にまとまっている。作業効率の良さ、省力化によって林さんの地元である洪城での生産コストと比べ、60～70%に抑えることができるという。

「他にもメリットはあります。周りに建物がなく太陽光が圃場全体に当たるので稲の登熟が高まる。淡水湖からの水を循環利用しているので今年のような旱魃の年にも水に困らない。干潟の土壌なのでミネラル養分

も豊富で収量上がる」

ただ干拓地のデメリットも挙げた。「塩分が上がってくる心配は常にある。ここは中国からの黄砂が最初に飛んでくる場所。病虫害も一緒に運んでくるためほ場の観察が欠かせない。干拓地特有の多年草の雑草ははえてくるのも悩みの種」という。それでも現在、反収は570 kg。周辺地域の平均反収500 kgに比べても多い。

自動化育苗施設を建設し、1/3のコメは直販する

瑞山干拓地で乾燥・調製施設を持つているのは、林さんの営農組合法人のほか、別の1法人と現代グループの3カ所だけだ。国のコメ政策が大規模化、団地化に舵を切ってきたこともあって、そこに当てはまる同法人は06年、50%の補助を受けて現在の乾燥・調製施設を建設した。

収穫後、乾燥施設への搬入時に水分をチェックし、16、17%になるまで乾かす。乾燥機は9台。2棟あるサイロは下部から空気を送り、混ぜながら通風乾燥するため、低温で保管ができるが、生産量（約1500 t）のうち400 t分しかサイロ内に保管できないため、残りはフレコンで保管し、早めに出荷する。

さらに10年には自動化育苗施設を

あきらめず、自負心を持ち続け、たどり着いた干拓地での大規模経営

建てた。8万箱分の苗を育てる。瑞山のような大規模ほ場であればコスト削減を目指し、直播に取り組んで当たり前と考える読者も多いだろう。実際、現代グループが01年から湛水直播に取り組んだがうまくいかなかったという。今も干拓地にある水田の90%が移植栽培だ。

以前、林さんとは別に瑞山干拓地に入植し、100ha規模で直播を始めたという江原道の稲作農家に会ったが、収穫時に台風の影響もあり、11年で瑞山の農場そのものを引き払ったという話を聞いた。林さんに会う前に視察で訪れた稲作農家も「韓国ではまだ直播の技術が完成していない」と話していた。

つまり、林さんたちが建てた自動化育苗施設は、直播技術が確立されていないなか、200haを超える水田の田植えを行なうために欠かせない施設になっている。

同法人は、瑞山干拓地における代表的な大規模稲作法人にのしあがった。法人経営を始め、4年目から少しずつ黒字を出せるようになり、現在、売上は約30億ウォン（1ウォン＝約0・07円）。

さらに国から「地域別最適経営体」として認定されている。これは、従来の個別経営から脱皮し、100（150haを単位とする法人（生産

組織）に再編していこうという政策の一環で09年から導入した制度。認定されれば補助金や研修受講などメリットがある。林さんが会長をつとめる「米專業農」の会員農家は約7万人、平均の経営規模は4・5ha。「もっと大型化しないと生き残りは難しい」と林さんはいう。

実は、瑞山干拓地は別の面でも注目されている。大規模稲作が始まって以来、環境が変わった。電気もなく人が住んでいないこともあり、淡水湖の生物たちが訪れるようになったのだ。なかでも秋に入ると、200万羽ものトモエガモが渡来するようにになり、国内最大のトモエガモ渡来地として知られるようになった。政府は干拓地内に100haの農地を買収し、鳥たちのための湿地を造成したり、農家にもコメの収穫後に、鳥の餌になる小麦を撒くように指示するなどかなり乗り気だ。

林さんたちも農作業が少ない11月から5月まで、消費者会員を相手にした農業体験プログラムを開く。20kg袋の精米・袋詰のラインも整備し、1／3は消費者などに直販。残りは価格や条件を見ながら、農協運営のRPC（Rice Processing Center。カントリーエレベータと精米施設を合わせた施設）か、民間業者が運営するRPCに出荷する。



9



8



12



11



10

8田植機はクボタ製の6条植えが2台、8条植えが4台。メインは8条植えだが、入っていけないところは6条植えで対応。9ジョンディアトラクタ。輸入モデルではなく、韓国内供給モデル。その他、90馬力のトラクタ4台でほぼ作業する。10チゼルプラウ。田植えの前にかける。干拓地は深く起こすと塩分が上がってきってしまうので、耕深は10～15cm。11前後にポンプを載せた管理機。入水後の防除や追肥作業には欠かせない。4台保有。12ヤンマー製の6条刈りの自脱型）コンバイン（AW695）。合わせて3台で収穫する。



14



13

13乾燥・精米施設。実際には生産と乾燥、調整工程の2つの法人に分かれていて後者は補助を受けている。組織は2つあるが、作業は同じ人員でまかっている。**14**左側は営農組合法人の理事の1人。平日は会議などでソウル市内にすることが多い林さんに代わって、理事たちが現場作業を担当。

帰農者としての意地

入植当初の苦労をもっと聞きたかったのだが、あまり詳しく話さなかった。むしろ「私は帰農した人間。今は韓国もブームで大勢の人が帰農する。時々、帰農者向けの講演で話をするが、農業で身を立てるのなら、1つ目は最後までやりぬくこと。2つ目は自負心を持ち続けることが大事だと伝えます」と強調した。

この言葉の裏には、ここまで来るまでにあきらめかけたこともあったし、自負心を失いかけたこともあったということかもしれない。最初に見せた威厳ある態度は、帰農者としての意地、帰農者としてここまで登りつめた自負心によるものだったのだからかと感じた。

ほ場を案内してもらい、昼食を一緒にとる頃にはすっかり打ち解けて、さまざまな話をしてくれた。

聞くと、故郷に戻ってから結婚したそう。奥さんはソウル市出身。「農業のことは何も知らない。年離れた両親と子供の面倒をみてくれれば何をしていいと言ったんです」

奥さんは数年前から、事情があつて十分な教育を受けられなかった子供や成人を集めて、勉強を教えるようになったという。林さん自身も学習塾を運営してきた。同じ夢を叶え

た奥さんについて語る時の誇らしげな表情は今も忘れられない。

2人の子供にも恵まれた。小学校5年生の長男、4年生の長女。

「長男は農業をやるといつてくれるんです。だから息子には『ちゃんと勉強しないと農業はできないぞ』といつて尻を叩いています」

林さん自身も帰農後、韓国放送大学校農学科を卒業し、現在はソウル大学の農業生命科学科の最高農業政策課程を受講中でもある。さすがに幼い息子を後継者にするかどうかは決めていないそうだが、「理事たちの息子もやりたいと言っている。いろんな役職を終えれば後進の育成をと思っている」と微笑んだ。これが林さんの素の姿なのだった。

変化をいとわない韓国

林さんの農場を日本の稲作農家たちが訪れていたらどんな感想を持つだろうかと思つた。田んぼや設備を見て「まだまだ日本の方が上だ」と言うかもしれない。直播技術を確認してないことに物足らなさを感じる農家もあるだろう。私は少し違う見方をしている。

帰農者である林さんがここまでの経営者として君臨していたことに非常に驚いた。韓国は日本以上の学歴社会だ。もちろん、誇りを持って経

営をしている農家も前からいる。それでも農業に対する社会全体の見方は低かった。

それがいま、韓国では大々的な帰農ブームだという。11年には1万人が田舎暮らしを始め、8割が「農業をやりたい」と言っていると聞いた。ベビーブーム世代が大量に定年退職したこと、若者が農業に関心を持つようになったことが背景にある。韓国でも60歳以上の農家が40%以上を占め、高齢化が進んでいるが、外から入ってくる人々によって世代交代も急速に行なわれていくかもしれない。韓国の人々の農業に対する見方、価値観が変わつたと強く感じた。

林さんに出会う前、「全国土を考える会」の韓国視察で講演してもらつたサムスン経済研究所の閔勝奎（ミン・スング）さんがこういつた。「30年ぐらい前、韓国の農業は日本より20年遅れていた。でもいまは5年ぐらいに縮まつた」。実は閔さんは「もうじき日本を追い越しますよ」と言いたかつたのではないのか。

「FTAによって（工業の成長を選んだ）韓国は農業を捨てましたね」という日本の農家、関係者に何人も出会つた。私は全くそう思わない。現場を見ることなくこのように切り捨てることこそ危険だ。変化を厭わない韓国から学べることはある。